撥音ンの性格

——表記と音価の問題——

奥村三雄

〔一〕 一言語社会における音韻体系というものは、『各フォネームが、すべて、平面的、等間隔的にならんでいる』という様なものでなく、むしろ、『それ〴〵の聴覚的印象の親疏関係により、逐次、小グループから大グループへ体系づけられてゆく』という様な性格のものと考えられる。——例えば、現代日本語において、子音s・k・g・ngは、いずれも、音韻論的対立をなしているのであるが、その中、k対gの対立は、s対kの対立よりも下位的なものであり、g対ngの対立は、それよりも更に下位的な対立であるという様に。——各フォネームの音価なるものは、少くとも、かかる意味において、音韻論の上に位置づけられるはずなのである。

又、一方、各音の具体的構造を考えずしては、音韻変化や音韻変遷等の現象も、充分説明できないという事、論をまたないであろう。

音韻論的音価考証のしごとは、かかるところに、その出発点——ひいては、その目的——を求めんとするのである。

——尤も、そこには、『音韻論のねらいとする所は、あくまで、各フォネーム相互の対立関係であり、各音の音価自体は音韻論外の問題である』という様な意見もでてくるはずなのであるが、之に対する直接的批判は、又、別の機会をまつ事としたい。

ところで、古い時代における各かなの音価を推定するということは、実際問題として、そう容易ではない。少くとも、いわゆるかな文学の文献では、殆んど手がかりがない。多くの場合、最も有力な手がかりをうるのは、「外国語の発音をかなで表記した資料」及び、「日本語の発音を外国の文字で表記した資料」である。

その他、当時における発音を直接説明した資料があれば、それは勿論、外部徴証として役立つであろうし、又、当時における音韻変化現象や、現在各地の方言音等を傍証とする事もできるのであるが、しかし、前者の様な資料は、かなり稀であるし、後者の場合は、あくまで、傍証の域を出でないのである。

之に対し、外国語との対応関係を考えうる資料においては、当時の外国語音を研究する事により、そのかなの音価を推論し得るはずなのであるから、方法論的にもすじが通っており、今まで

も、しば〳〵利用されているのである。

尤も、この場合においても、その「当時における外国語音」というのが面倒な問題であり、又、「二つの言語が接触したとき、必然的に起る表記法のズレ」という問題も考慮されねばならないのである。

こゝでは、『かゝる資料を用い、この様な方法でやって行くより他、今の所、しようがないんだ』という、一種の諦観のもとに、このしごとを進めたのであるが、とにかく、音価推定における資料及びその方法に関しては、尚、かなり研究の余地があるのである。

〔二〕 我々現代日本人は、現代北京語における「広東」の発音を、クワン|トン|と表記するのであるが、古くから、我国に伝えられる漢呉音によれば、それらは、クヮウ|トウ|となるのである。

つまり、現代では、「広 kuang」「東 tung」等の韻尾の ng を、「官 kuan」「頓 tun」等の韻尾の n と同様のものとして認識するのであるが、古い時代においては、むしろ、「高 kau」「透 t'ou」等の後部母音 u と同様の音として認識したらしいのである。

之は、一体、何を意味するのであろうか。

先ず、『それらの字の原音自体が、昔は、kuau tou の如き状態だったのではないか』という様な考方ができるであろう。

しかし、「広」「東」等の韻尾が、呉音や漢音の原音で、ng の如き鼻音であったという事は、今の所動かせない様である。詳しい証明は省くが、例えば、我国の漢音とよく似た体系をもつ朝鮮字音においても、はっきり、「〇」の如き鼻音表記がなされている(註1)のである。

又、『呉音や漢音の「ウ」表記が、「ン」と同じ鼻音を表わしていたのではないか』という様な考方もできるであろう。

しかし、呉音や漢音の資料においても、「官」「頓」等の韻尾 n には、はっきりした鼻音表記「ン」が与えられているのである。別に、「ン」表記があるのに、「ウ」で表記されるという事は、やはり、『それらの韻尾 ng が、ンよりも母音ウに近いものとして認識された』と考えざるをえないのである。

この様な考方が成立しないとすれば、そこには、当然、次の如き考方が提出されるはずなのである。即ち、『古い時代、我国中央語において、語尾の撥音ンは、n 音であった。そこで、当時の人々は、「官」などの n 音をンで表わし、「広」などの ng 音をウで表わしたのである。ところが、我国中央語におけるンの音韻論的音価は、次第に、舌音性を失い、ng に近いものとなって行った。こゝにおいて、ng 韻尾が、ンで表記される様になったのであろう。』

現代日本語における語尾の撥音が、大体、ng 音に似たものであるという事は、佐久間博士等によって詳しく説かれている所である。

尤も、現代、「三度(サンド)」のンは n 音、「三羽(サンバ)」のンは m 音という様に、その表われる位置によって、少しづつ違った発音になるという事は否定できないし、又、古い時代においても、之と同様の事があったろうと考えられるのである。

しかし、それらは、後続音に影響されてその様な性格をおびてくるのであるから、音韻論的な音価を論ずる場合には、その様な

変形を蒙らない語尾の場合をとらえるのが適当だと考えられるのである。

一方、古い時代の我国中央語における語尾のンは、大体、n音であった様である。院政期の「悉曇要訣」（一一〇一）という書等にも、ンは舌内の音だと説明されているのである。又、かって「御主（オンナルジ）」の如く、ンの後にナ行連声が起ったという事も、十分、ンの舌音性をものがたっているであろう。

それでは、かゝる変化はいつ頃に起ったのであろうか。

(三) 先ず注目されるのは、江戸時代初期中期に輸入された黄檗宋音の資料（註2）で、「広」などの韻尾ngが、既に、「官」などの韻尾nと同様ンで表記されるという事である。

例えば、「天和三年黄檗宝善庵性英独振拝行」の刊記ある「法華経普門品」の宋音資料には、ng韻尾の字が84あるが、それらは、東韻、陽韻という様な韻類の如何にかかわらず、殆んどすべて、「ーン」の形で表記されているのである。

ところで、この黄檗宋音は、大体、明時代の南京音、福州音に——その他、若干、呉語的要素をふくんでいるかもしれない——基づくものらしい。

しかして、現代南京音、福州音等で、通、江、宕、梗、曾摂等所謂喉内韻尾の字は、すべてngの韻尾を有している。

又、現代、中国の何れの方言をみても、喉内鼻音尾がすべて、舌内韻尾と同じn音になっているという様な所は認められない。

更に、古く、その様な状態を示す方言があったという様な事も、今の所考えられないのである。

唯、現代、興県・太谷・文水等のいわゆる西北方言において、喉内鼻音尾が、他の韻尾と同様に消失し、その直前の母音を鼻母音化しているという事は、注目すべきであるが、しかし、現代西北方言にのみ認められるこの現象と、黄檗宋音の原音における現象との間に、或系統関係を考えるという事は、ちょっとむりな様である。地域的にも、随分かけはなれているし、又、両者の音韻体系が全く相容れないものなのである。

古く、母音的に表記してきたng韻尾を、ンで表記したこの資料こそ、十七世紀頃、我国中央語における撥音ンの音韻論的音価が、既に、舌音性を失い、ng音に近くなっていた事を示すのでなかろうか。

尚、同系統の宋音資料たる、心越の寿昌清規（一七二七）や、冠山の唐話纂要（一七一八）等によると、当時、関東地方や長崎地方においても、略ゝ同様の状態だったろうと考えられるのである。

そういえば、関東方言の資料であるが、かの音曲玉淵集（一七二七）にも、ちょうどそう考えるのに都合のよい記述が認められる。

即ち、同書「二つはねの事」の条で、欄干ランカン、人間ニンゲン等のンにつき、「一つは軽かるべし」と説明されている。又、同書中、連声については、「折返すふしの下にて捨る事多し」とある。例えば、紅葉狩の「夜のまの露やそめつらん」という所をくりかえして謡う時等の場合、語尾のンは連声を起さないというのである。

之等は、いずれも、当時、語尾のンが軽い鼻音であった事を示していると考えられる。

〔四〕　ところが、この様に、『「広」等の字の韻尾ngに対する表記法により、日本語のンの音韻論的音価を考えてゆこうとする』場合、問題となるのは、臨済宗唐音のことである。

即ち、鎌倉時代に輸入されたらしい臨済宗曹洞宗の唐音資料（註3）において、「広」等の韻尾は「ン」「ウ」両様の表記法をもつのである。

しかして、一方、この資料の中では、ンの後のナ行連声現象がみとめられるのである。例えば、浄飲ジンニイン（新しい刊本では、浄飯とあるが誤であろう）　生安養サンアンイヤウ　ナアンニヤウ　輪廻リンヌイ　願以ゲンイニ（以上、花園校本施餓鬼）

中国原音において、かゝる連声現象が起っていたという様な事はちょっと考えられない故、之は、やはり、唐音輸入時代、我国中央語ンの音価が舌音nであった事を示すものといい得るはずなのである。

そうすると、『臨済宗唐音では、「広」「東」等の韻尾のngをンでうつすことがあるのに、当時のンの音価はnであった』という事になり、前述の考方に矛盾する事になる。

こゝで注目すべきは、『この資料において、ン表記のngの字とウ表記のそれとの間に或区別が考えられそうな』事である。

例えば、花園校本観音懺法（略号「カ」）及び小叢林略清規（略号「シ」）においては、次の如き状態である。

梗摂――全部ン表記――聖シン(シ)　正シン(シ)　星シン(シ)　井シン(シ)　昇シン(シ)　請シン(シ)　性シン(カシ)　程シン(シ)　成ジン(カシ)　静ジン(シ)　情ジン(シ)　浄ジン(カシ)　盛ジン(シ)　城ジン(シ)　頂チン(シ)　定チン(シ)　寧ニン(シ)　令リン(カシ)　霊リン(シ)　永イン(シ)　竟キン(カ)　経キン(シ)　傾キン(シ)　慶キン(シ)　軽キン(シ)　明ミン(シ)　命ミン(シ)　平ビン(シ)　病ビン(シ)　生サン(シ)　更カン(シ)　衡アン(シ)　宏ワン(シ)　清シン(シ)

曾摂――殆んど皆ン表記――勝シン(カシ)　称シン(シ)　証シン(カ)　乗ジン(シ)　仍ジン(シ)　拯ジン(シ)　応イン(カ)　憑ヒン(シ)　僧スン(シ)　増ズン(シ)　僧スン(カ)　登テン(シ)　等テン(カシ)　能ネン(シ)　楞レン(カシ)　弘ワン(シ)　証シン(シ)　亘コウ(シ)　恒ゴウ(シ)

通摂一等――殆んどン表記――送スン(シ)　総スン(シ)　聡スン(シ)　東ツン(シ)　同ヅン(カシ)　動ヅン(シ)　幢ヅン(シ)　功クン(カシ)　工クン(シ)　貢クン(シ)　空クン(シ)　洪ウン(シ)　鴻ウン(シ)　蒙ムン(シ)　蒙モウ(カ)　夢ム(シ)

通摂二三四等――ウ表記、ン表記、相半ばす――松スン(シ)　崇スン(シ)　竜ルン(シ)　容ユン(シ)　風フン(シ)　諷フン(シ)　豊ブン(シ)　中シュン(シ)　重ジュン(シ)　衆シュン(カシ)　供キュン(シ)　奉ブン(シ)　終シウ(シ)　種シウ(シ)　充チウ(シ)　用イウ(シ)　熊イウ(シ)　融ユウ(シ)　共キウ(カシ)　供キウ(カ)　恭キウ(シ)　宮キウ(シ)　誦ズ(シ)　鞏キヤウ(シ)　凶ヒヨウ(シ)

宕摂――殆んど皆ウ表記――仰ニヤン(シ)　香キヤン(シ)　相シヤウ(シ)　章シヤウ(シ)　賞シヤウ(シ)　掌シヤウ(シ)　昌シヤウ(シ)　象シヤウ(シ)　将シヤウ(シ)　祥ジヤウ(シ)　上ジヤウ(カ)　攘ジヤウ(シ)　仗ジヤウ(シ)　長チヤウ(シ)　場ヂヤウ(シ)　良リヤウ(シ)　量リヤウ(シ)　両レウ(シ)　養イヤウ(カシ)　王ヤウ(カシ)　陽ヤウ(シ)　往ヤウ(シ)　旺ヨウ(シ)　向キヤウ(シ)　貺ヒヨウ(シ)　荘サウ(カシ)　滄サウ(シ)　当タウ(シ)　宕タウ(シ)　蕩タウ(シ)　堂タウ(シ)　朗ラウ(シ)

皇ワウ(シ)　剛カウ(シ)　康カウ(シ)　航カウ(シ)　光クワウ(シ)
広クワウ(カシ)　方ハウ(カ)方ハウ(シ)　坊バウ(シ)　望バウ(シ)
亡モウ(カ)

江摂―全部ウ表部―雙サウ(シ)　降ヲウ(シ)

この問題は、かって、有坂博士が注目され（註4）ながら、疑問として残された所なのである。

しかし、こゝで、若干の例外を許容する立場にたつならば、やはり、『同じ喉内韻尾の中でも、梗・曾摂はンで写され、江・宕摂はウで表記された』という傾向性を認めうるはずなのである。更に、その若干の例外現象も、資料をもっと古いところに求めてみると、非常に少くなってくる様である。撮壌集―（嘉吉頃の人善永祥の著か。略号「サ」）下学集（文安元年の序あり。略号「カ」）節用集（こゝでは易林本を扱う。略号「セ」）の中の唐音資料において、ンで表記される喉内韻尾の字を全部あげると、次の如くである。

梗摂―清シン(サ)　請シン(サカセ)　浄シン(カセ)　聖シン(サ)
丁チン(カ)　頂チン(セ)　亭チン(カセ)　聴チン(サカセ)　鈴リン(サセ)
霊リン(カ)　径キン(カ)　経キン(サセ)　磬キン(サセ)　兄キン(サ)
兄ヒン(カセ)　乗ヒン(サカセ)　餅ヒン(サセ)　瓶ヒン(カセ)　明ミン(サ)
冷レン(カセ)　羹カン(カセ)　庚カン(カ)　行アン(サカセ)　杏アン(サセ)

曾摂―蔭シン(サカセ)　蒸シン(セ)　證チン(サカセ)　菱リン(カセ)
稜レン(サ)　楞レン(セ)　燈ドン(カ)

通摂―松スン(カ)　紅ウン(セ)　竜リン(サカセ)　通トン(サ)
銅トン(セ)

之等以外の喉内韻尾は、すべてウで表記されるのである。前述の資料にみられた　香キヤン　仰ニヤン　（宕摂）の類は全く認められず、又、通摂の場合についても、前述資料では、ン形、ウ形相半ばしていたが、こゝでは、ン形は極めて稀なのである。尚、右にあげた中でも、竜胆という語にのみ現われる竜リンは、唐音語なる為のン形ではないかもしれない。その他、例外的な通摂の四字（松・紅・通・銅）についても、その唐音語としての時代性を考えれば、救わるべきものかもしれないのである。

とにかく、鎌倉期に輸入された臨済唐音において、梗曾摂韻尾がンで写され、江宕摂韻尾がウで表記されたという事は、一往、認められよう。

『臨済唐音でンにうつされる梗曾摂の韻尾は、その原音において、ngからnに変っていたのでなかろうか。』

この様な場合、『中国の韻書をたどってみるに、喉内韻尾ngの一部がnに変っていたという様な事は考えられない。かかる現象は、勿論、日本語の問題である』という様にもってゆく事は、非常に危険である。――韻鏡等が、単なる一時代の人工的規範にすぎないという事は、常に注意しておらねばならないのである。―さて、この臨済唐音は、有坂博士も説かれた如く、大体、宋、元時代の浙江地方語に基づくものと考えられるのであるが、Karlgren　趙元任等諸氏の示す所によれば、現代浙江地方語の大部分においては、所謂喉内鼻音尾ngの一部がnに変化しており、それが、やはり、梗・曾摂の場合に限っている（註5）様なのである。

例えば、杭州音においては、次のごとくである。

梗摂―更、争、横、行、いずれも -ən。杏、傾、命、営、

丁、いずれも -in。兄、迥、いずれも -iong

曾摂—恒、肯、能、仍、いずれも -ən。朋など -ong

通摂—公、宋、憑、竜、従、弓、いずれも -ong 熊、絨、いずれも -iong

宕摂—剛、方、嘗、いずれも -Ang。光、荒、狂、王いずれも -u∧ng。両、香、相、いずれも -i∧ng

江摂—邦、江、雙、いずれも -Ang。講など i∧ng

そして、更に、現代浙江語におけるその現象は、かなり古くまでさかのぼれる様なのである。例えば

王沂孫の花外集(知不足斎叢書所収)中の詞において、次の如く、n韻とng韻との通押現象が認められるのであるが、この場合のng韻も、やはり梗・曾摂に限るのである。

(斉天楽) 碧痕初化池塘草。熒々野光相趁。扇薄星流。盤明露滴。零落秋原飛燐。練裳暗近。記穿柳生涼。庾荷分瞑。誤我残編。翠嚢空嘆夢無準。楼陰時過新点。依闌人未睡。曾賦幽恨。漢苑飄苔。秦陵墜葉。千古凄涼不尽。何人為省。但隔水余暉。傍林残影。已覚蕭疎。更堪秋夜永。(斉天楽の譜は、「双調一百二字前段十一句五仄韻、後段十一句五仄韻」)

(南浦) 柳外碧連天。漾水紋(読)漸平低蘸雲影。応是初消。巴山路(読)蛾眉乍窺清鏡。緑痕無際。幾番漂蕩江南恨。弄波素襪知其処。空把落紅流尽。(以上は南浦の前段である。南浦の譜は種類が多く、この詞の区切り方もよくはわからないのであるが、恐らく、「双調一百五字、前後段各九句四仄韻」の体であろうと思われる)

この作者王沂孫が、南宋の詞人、浙江会稽の人なる事は言をまたない。

その他、資料的価値はやや劣るが、大唐三蔵取経詩話や京本通俗小説などの中の詩にも、同様の通押現象が認められるのである。京本通俗小説は、「影元人鈔本」というのが怪しいらしく、かなり問題があるのであるが、取経詩話の方は、呉語の歴史を考える資料となるべき可能性が大きい。(註6)この書は、「中瓦子張家印行」という事になっているが、その張家は、宋時代、該地方の有名な書舗であったのである。

尤も、この場合、逆に、それらn韻尾の一部がng韻に近くなった為の通押現象と考える事もできそうであるが、しかし、真文韻のn韻尾だけがngに変るという事は、音声変化として不自然であり、やはり、先行母音の影響による喉内韻尾(梗・曾摂のみ)の舌音化とみなす方が妥当な様に思われるのである。

私は、右の如き舌内韻尾と喉内韻尾との通押現象を、梗・曾摂韻尾の舌音化によるものと考え、そこから、現代呉語方言におけるかの現象が、宋代頃までさかのぼり得るものなる事を認めようとするのである。

現代、呉語と同様、梗・曾摂韻尾の舌音化を示す地方としては、客家語、四川官話、広東語等が存するのであるが、何れも、宋代或はそれ以前にまでさかのぼり得ると思われる徴証があるのである。

中国語諸方言における入声韻尾の消失は、十世紀頃から萌していたといわれる。又、北京語におけるm・n韻尾の混乱も、五代、宋頃には起っていたらしい。かかる現象と並行して、それから遠からぬ頃に、梗・曾摂韻尾が、前行体母音の影響で舌音化されたという事は、極めて自然な事であろう。

『宋時代浙江地方の言語(つまり、之が、臨済唐音の原音なの

であるが）の中で、梗曾攝韻尾のngがn韻に変っていた』とすれば、『臨済唐音資料にみられた、梗曾攝韻尾のン表記は、ng韻に対応するのでなく、n韻に対応するものである。つまり、この資料では、ng韻は、すべてウで表記される』という事になるであろう。そうすれば、結局、『臨済唐音の輸入された鎌倉時代において、我国中央語におけるンの音価はまだnだった』と考えて、すべてがうまく解決する事になるのである。『同じ臨済唐音資料の中で、時代の新しい資料になる程、梗曾攝以外の喉内韻尾におけるン表記が増してくる（つまり、「竜リン」等の例外現象がふえてくる）』という事も、当時、我国中央語のンが、次第に、n音からngに近い音に移りつつあったという事を示している様に考えられる。

以上、私は、「広」「東」等の韻尾が、どんなかなで表記されるかという事を根拠とし、若干の傍証を補いつつ、『我国中央語における撥音ンの音韻論的音価が、n的なものから、ngに近いものに変って行ったのは、鎌倉末期～江戸初期の間であろう』という事を考えたのである。

〔五〕 そういえば「御主オンナルジ」の如き、ンの後のナ行連声現象は、鎌倉室町時代、かなり盛に行われたらしい（註8）が、江戸時代頃には、大体その勢力を失っていた様である。この事も、やはり、当時撥音ンが舌音性を失っていた結果と考えられよう。

尤も、之については、『当時、次第に、文字言語の習得が盛になってきたので、それにつれて、連声現象が少くなったのだ』という様な事も考えねばならないはずなのであるが、私は、それと一緒に、撥音ンの音価の問題も考えあわせたいのである。同じ連声現象の中、t入声音（促音）の後のタ行連声は、やはりこの頃衰えて行った様であるが、之についても、『当時語尾促音としてのt入声音がなくなり、「突 tat→tatsu の如き変化が起ったのだ』という様な事情が考えられるであろう。又、「三位サンミ」の如きマ行連声現象が、比較的早く衰えたのも、m撥音が早くなくなった結果と考えねばなるまい。

室町期のいわゆるキリシタン資料において、日本語の撥音ンは、若干の例外を除き、大体、nでうつされているのであるが、江戸時代になると、ンをngで表記説明した資料が相当認められるのである。

例えば、Rosney の "Introduction à l'étude de la langue Japonaise"（1856）の本文では、「日本語のンは普通はn音」と説かれているが、その脚註にひかれた "Chinese Repository"（1832～51）中の論文 "Notices of the people of Japan" では、「日本語のンは不純な鼻音で、支那音のngを表わす為に発達した文字で、他と結合した場合はn音なるも、語尾ではngに近く、舌を口蓋につけ喉頭で出す音」という様に説明されている。その他、錦港堂版の横文字早学（一八六六）や、桂川甫策の英仏単語便覧（一八六八）でも、ンはngで表記されている。更に、Van Reed の和英商話（一八六二）では、ンをgnで表記しているのであるが、之もngに準じて考えられるのでなかろう（註7）か。

この様に考察してくると、先程、漢字音資料に基づいてたてた『撥音ンの音価に関する推論』は、愈〻確実性をましてくる様なのである。

所で、この様な推論が認められるとするならば、我々は、そこ

から発展させて、いろんな問題を考え得るであろう。

例えば、「頼うだ」の如きマバ行四段動詞のウ音便形は、鎌倉室町時代、相当盛に用いられたのであるが、江戸時代以後、次第に、撥音便形が多くなり、表記の上からすれば、そこに、ウ母音→撥音ンという様な音変化が考えられそうなのである。しかし、一方、そのウ音便形は、その後を連濁させる点等から考えて、母音のuを表わしているとはみなしがたい（ウ音便は、「買うた」「高うて」の如く、一般に、その後を連濁させない）のであり、又、室町期～江戸初期頃におけるウ音便形、撥音便形の混用状態からみても、音韻の問題とは考えがたいものがある（註9）のである。

かかる場合においても、やはり、『頼うだ（室町）→頼んだ（江戸中期以後）の変化は、単なる表記の変化であり、音自体は変化せず、共にngに近い音価だったのだ。ンの音韻論的音価が変った為、表記が変化したのであろう』という様な考方を提出する事ができるのでなかろうか。

その他、未来・推量助動詞「ム（ン）」から「ウ」への変遷など、いろんな語におけるン形とウ形との対立現象について、かゝる観点からの考察が必要なはずなのである。

それらについては、一切、別の機会をまつ事にしたい。

（本稿の大部分は、昭和二十九年秋、訓点学会講演会において話したことである。）

（註1）日本側の資料でも、承暦本最勝王経音義等一群のものでは、やはり、「広」等喉内韻尾に鼻音表記を与えているのである。尤も、之は、遠藤博士等が説かれた如く、学者的表記と考えるべきものの様であるが。

（註2）黄檗宋音の性格については、「国語と国文学」十五10における有坂博士の論文参照。

（註3）臨済唐音の性格については、「言語研究」2における有坂博士の論文参照。

（註4）尚、浜田敦氏も、「国語国文」二十三3中の論文において、この問題を論じていられる。但し、氏は、「同じ鼻母音的なものが、前の母音の差により、ン或はウとなったのだ。」という様に、之を日本語の問題としていられるのである。

（註5）臨済唐音資料、及びその原音における喉内韻尾の問題については、かって、「国語国文」十九3中の論文でのべた事がある。

（註6）京本通俗小説については、魯迅「中国小説史略」等参照。又、取経詩話を、従来、宋代の作と考えてきた理由は、張家が宋時代臨安の大きな書舗だった事なのであるから、もし、張家が元代まで続いたとすれば、この理由は成立しなくなるのである。しかし、とにかく、之が、浙江地方の作なる事は動かないであろうし、又、この書が、元の戯曲「西遊記」のもとになっている事等を思えば、そう時代を下げる事はできぬはずなのである。

（註7）尤も、之等の表記が何に基いたものかという事については、かなり問題があろう。例えば英仏単語便覧では、日本語の「いろは」に二通りの表記法を与えているのであるが、その両者にはかなり大きな差があり、英語的、仏語的表記の

差のみとは考えられないものがあるのである。ハ—fa・ha チ—tchi・tsi カ—ka・ca ヨ—yo・io グ—gue・ghe等。

（註8）かゝる連声表記は、謡曲等特殊な資料にしか現われないので、一般の話し言葉としては連声は起らなかったのでないかという様な考方も提出されているのであるが、しかし、現代九州その他各地の方言に認められる連声現象を、謡曲の発音法の名残だという事はできないはずなのである。現代普通に、ミヤイ（見合）と発音しながら、ミアイと表記している事等を考えあわすべきであろう。

（註9）尚、このマ・バ行四段動詞は、中古期の資料において、既に撥音便形が認められるのであるが、これも、『中世期の資料におけるバ四マ四のウ音便的表記が、母音uを示すものでない』事を傍証しているのでなかろうか。即ち、『撥音ン（中古）→母音ウ（中世）→撥音ン（近世）』という様な過程は非常に不自然であり、むしろ、『ン（n）（中古）→ウ（ng的）（中世）→ン（ng的）（近世）』という過程を考えるべきものの様に感ぜられるのである。

——京都学芸大学助手——